



## ベルベル人 ——歴史・思想・文明——

ジャン・セルヴィエ 著

私市正年・白谷望・野口舞子訳 東京 白水社 2021年 177+v p.

本書はフランスの『クセジュ』シリーズとして1990年に刊行された *Les Berbères* の第六版（2017年出版）の訳書である。「ベルベル人」という一般に知られた用語がタイトルに使われているが、著者が指摘するように、これは征服者が軽蔑的な意味を込めて用いた呼称である。そのため、近年ではイマズィゲン（単数形アマズィグ）という自称が用いられることが多い。

ベルベル人はマグリブ（北アフリカ）地域の最古の住民である。彼らの祖先については諸説あるが、彼らがこの地に住み始めてから、次から次へと侵入者が押し寄せた。侵入者たちは、時には占領者に、時には亡命者になり、ベルベル社会と影響し合った。数千年間そこにいたベルベル人はマグリブの歴史の緯糸であり、著者はこのようなマグリブ社会を万華鏡のように移り変わるものだと表現する。

ベルベル語はベルベル人を特徴づける重要な要素であるが、実際にはベルベル語と称される言語は数千にのぼるといふ。言語学的に共通性を持ちながらも各集団間で意思疎通ができないことが多く、ベルベル語の話者たちも互いの話す言語を別の言語として認識する。これは書き言葉の欠如、話者の居住地の広がり、異なる諸集団間において社会関係が欠如していたことに起因する。しかし、一見ばらばらに見えるベルベル人の諸集団を観察すると、二元的思想（たとえば「光」と「闇」）をはじめとする、地中海文明の上に築かれた共通したベルベル的思想と文化が確かに存在することがわかるという。ベルベル人が「ネイション」を形成することはなかったとしても、アラブの歴史家イブン・ハルドゥーンの言葉どおり、ベルベル人は、「この世におけるアラブ人や、ペルシア人、ギリシア人、ローマ人と同様に真の民族なのである」（p.11）。

ベルベル人の歴史がイスラーム王朝の歴史であり、また地中海世界の変動の歴史でもあるため、マグリブをアフリカ世界に位置づけるのは不可能であったと著者は断言しているが、マリやニジェールまで広がるトゥアレグ族のことやサハラ交易など、ベルベル人とサハラ以南アフリカとの関係性についてももっと知りたいと思った。本書は一般書として出版されているが、この地域の歴史や地理に詳しくない人にとってはやや手ごわいかもしれない。とはいえ、ベルベル人の歴史と文明を網羅的かつ凝縮して描いた本書を、マグリブ研究の第一人者である訳者たちの注釈を交えながら日本語で読めるということは非常に幸運なことである。

金 信遇（きむ・しんう／アジア経済研究所）

